

公立大学法人大阪

大阪公立大学大学院
リハビリテーション学研究科
研究紹介ガイドブック

Osaka Metropolitan University

Graduate School of Rehabilitation Science

大阪公立大学大学院 リハビリテーション学研究科

— 2026 —

目 次

◇大学院リハビリテーション学研究科の概要.....	1
■リハビリテーション学研究科 リハビリテーション学専攻 理学療法学領域.....	3
博士前期課程 教員連絡先及び主な研究分野.....	3
博士後期課程 教員連絡先及び主な研究分野.....	4
■リハビリテーション学研究科 リハビリテーション学専攻 作業療法学領域.....	16
博士前期課程 教員連絡先及び主な研究分野.....	16
博士後期課程 教員連絡先及び主な研究分野.....	17
◇交通アクセス.....	29

◇大学院リハビリテーション学研究科の概要

大阪公立大学大学院リハビリテーション学研究科は、大阪府立大学および大阪市立大学の統合により 2022 年 4 月に新設されました。前身である 大阪府立大学大学院総合リハビリテーション学研究科における研究活動を継承してさらに進展させ、健康寿命の延伸や自立支援型福祉社会の実現に寄与するために、理学療法学領域 と 作業療法学領域 の 2 領域からなるリハビリテーション学研究科を新たに設置しています。

本研究科は、医学部リハビリテーション学科の教育の延長線上に位置づけられ、人々の健康と生活の質の向上に貢献するより高い資質を持った医療専門職者や研究者の育成と、リハビリテーション全般に関する教育・研究体系の確立およびその進展を目指します。すなわち、疾病の予防、治療あるいは障害の進行の抑制・回復に留まらず、地域での自立や社会参加の支援などに至る、広範囲なりハビリテーションの展開を重視しながら、医学分野と連携したりハビリテーション学の確立を目指した研究科です。

また、理学療法学、作業療法学という身体・精神面からのアプローチと生活や社会面からのアプローチを一つの教育研究体系として連携させることにより、従来にない能力を身につけた人材の育成を図ることができると考え、リハビリテーション学専攻の 1 専攻で組織構成しています。

◇大阪公立大学大学院リハビリテーション学研究科 ホームページ
本研究科の活動は、以下のサイトでご覧いただけます。

<https://www.omu.ac.jp/reha/graduate/>

◇大学院リハビリテーション学研究科 入試情報サイト
本研究科の学生募集要項は、以下のサイトでご覧いただけます。

https://www.omu.ac.jp/admissions/g/exam_info/graduate/g_s_med_reha/

■リハビリテーション学研究科 リハビリテーション学専攻 理学療法学領域

理学療法学領域は、運動制御、神経生理、運動器理学療法、内部障害理学療法、障がい者スポーツ支援、高齢期リハビリテーション、ウィメンズヘルス、予防理学療法など、基礎から臨床までの幅広い研究に取り組んでいます。

博士前期課程 教員連絡先及び主な研究分野（2025年4月現在）

名前	職名	アカウント	主な研究分野
岩田 晃	教授	iwata	運動科学、スポーツ科学
樋口 由美	教授	Higu_reha	高齢期リハビリテーション、老年学
平岡 浩一	教授	hiraoka	運動制御、運動学習、神経系理学療法
淵岡 聡	教授	Fuchioka	運動療法、運動器理学療法
宮井 和政	教授	kazumasa	成熟期シナプス可塑性、 管腔臓器の内臓感覚調節機構
上村 一貴	准教授	kuemura	介護予防、健康教育、疫学
片岡 正教	准教授	kataokam	障がい者スポーツ、 脳性麻痺・脊髄損傷のリハビリテーション
上田 哲也	講師	ueda	高齢者の転倒予防、 福祉住環境整備
音部 雄平	講師	otobe	内部障害リハビリテーション、 急性期リハビリテーション
杉山 恭二	講師	k.sugiyama	運動器理学療法、スポーツ理学療法
森野 佐芳梨	講師	saorim	ウィメンズヘルス理学療法、バイオメカニクス

- 連絡は電子メールでお願いいたします。
- メールアドレスは、アカウント@omu.ac.jp になります。

■リハビリテーション学研究科 リハビリテーション学専攻 理学療法学領域

博士後期課程 教員連絡先及び主な研究分野 (2025年4月現在)

名前	職名	アカウント	主な研究分野
岩田 晃	教授	iwata	運動科学、スポーツ科学
樋口 由美	教授	Higu_reha	高齢期リハビリテーション、老年学
平岡 浩一	教授	hiraoka	運動制御、運動学習、神経系理学療法
淵岡 聡	教授	Fuchioka	運動療法、運動器理学療法
宮井 和政	教授	kazumasa	成熟期シナプス可塑性、 管腔臓器の内臓感覚調節機構
上村 一貴	准教授	kuemura	介護予防、健康教育、疫学
片岡 正教	准教授	kataokam	障がい者スポーツ、 脳性麻痺・脊髄損傷のリハビリテーション

- 連絡は電子メールでお願いいたします。
- メールアドレスは、アカウント@omu.ac.jp になります。

1. 主な研究内容について

アスリートから高齢者に至るまで幅広い対象者の「運動パフォーマンスの向上」を目的とした、規定要因の分析や介入研究に取り組んでいます。現在取り組んでいる主要な研究テーマは、1) 地域在住高齢者・整形外科術後患者の歩行速度向上を目的とした要因分析・介入研究、2) AIやオンラインを用いた運動介入、3) 立位姿勢のタイプ分類に基づく運動プログラムの開発、4) 野球選手・サッカー選手・バスケットボール選手のパフォーマンス向上に関する研究、などです。

また、社会実装として、トレーニングマシンや運動プログラムの開発など、下記の企業等との共同研究に力を入れており、大学院生もメンバーとして参画しています。

2. 主な共同研究先

ミズノ株式会社, 阪急阪神ホールディングス株式会社, 日東工器株式会社, 自治体 (池田市など)

3. 今まで指導した学位論文名

<博士論文 (過去5年)>

2019年度 『The importance of movement velocity on gait speed and the effects of movement velocity training for older adults in geriatric health services facilities』

2023年度 『The Role of Plantarflexion Movement Velocity in Walking in Older Adults』

<修士論文 (過去3年)>

2021年度 『回復期リハビリテーション病棟における下肢整形外科術後高齢患者の体幹回旋運動速度と歩行速度との関連』

2021年度 『オンラインでの同期型の集団体操と非同期型の個別体操の併用が地域在住高齢者の身体機能に及ぼす影響』

2021年度 『投球パフォーマンスを規定する要因に関する研究』

2022年度 『脳卒中片麻痺患者と地域在住高齢者の歩行能力と Rate of Force Development に関する研究』

2022年度 『野球のスイングのタイプ分類とその特徴 -最大速度とインパクトのタイミングの違いに着目して-』

2022年度 『AIを用いた生体反応の解析システムの開発および実用性の検証』

2023年度 『高齢者の移動能力における股関節・足関節機能の重要性および各部位への介入効果の検証』

2023年度 『脳卒中後片麻痺者の麻痺股関節と膝関節に着目した歩行速度に関する研究』

2023年度 『スローインの飛距離の決定要因分析と飛距離を向上させるウォーミングアップの効果検証』

2023年度 『バスケットボール選手におけるコンタクトバランス能力に関連する要因について』

2023年度 『体幹回旋を伴う持ち上げ動作の腰部負荷分析と体幹回旋を制限するサポーターの開発』

4. 主な論文

- Kanayama A, Yamamoto S, Iwata A (Corresponding author), et al. Age-related changes and sex differences in ankle plantarflexion velocity. Sci Rep. 2023
- Iwata A, Sano Y, Wanaka H, et al. Recovery of gait speed and timed up and go test in three weeks after total knee arthroplasty. Eur J Physiother. 2023
- Iwata A, Sano Y, Wanaka H, et al. Maximum knee extension velocity without external load is a stronger determinant of gait function than quadriceps strength in the early postoperative period following total knee arthroplasty. PLoS One. 2022
- Yamamoto S, Iwata A, Yano Y, et al. Preliminary study on the effects of movement velocity training of the upper limbs on gait ability in older adults: a nonrandomized controlled trial. Clin Interv Aging. 2019

5. 現在の指導している大学院生数

M1 : 2名, M2 : 3名, D1 : 1名, D2 : 2名, D3 : 2名

6. どのような大学院生の受け入れを希望するか?

「運動パフォーマンスの向上」に興味があり、研究に取り組む意欲がある方をお待ちしています。

1. 主な研究内容について

＜高齢者の歩行機能に着目した介護予防研究＞

- 1) 都市部における社会的フレイルな高齢者の活動・社会参加を歩行機能から賦活化する
- 2) 施設高齢者の日常の歩きのセンシングによる転倒リスク評価

2. 主な共同研究先

(株) ORPHE、UR 都市機構西日本支社、滋賀医科大学社会医学講座衛生学部門、

3. 今まで指導した学位論文名

＜博士論文＞

2024 年度：『Integrating Health Promotion to Address Social Frailty Among Urban Older Adults』

2024 年度：『Rehabilitation approach to improve the psychological stress for family caregivers of inpatients』

2022 年度：『A Study on Integrating Health Promotion to Address Social Frailty Among Urban Older Adults Discharge to Home and Information Sharing with Patients' Families in Inpatient Rehabilitation of Patients with Stroke』

2020 年度：『Home-based rehabilitation to improve life-space mobility for older people』

2019 年度：『Approach to improvement of health-related quality of life using physical activity for housewives』

2019 年度：『Effective Intervention Strategies for Increasing the Number of Steps in Frail Older Adults』

2017 年度：『Tailored education program preventing falls for discharged older patients in acute care hospital』

2016 年度：『Comprehensive study for preventing falls in Long-Term Care Health Facility』

2014 年度：『Falls prediction in community-dwelling older adults: a dual-task study using an extended walking distance』

2014 年度：『Increased push-off improves gait in children with cerebral palsy』

＜修士論文＞ 2019 年度以降掲載

2024 年度：『スマートフォン利用状況の違いにおける都市部在住高齢者の特徴』

2024 年度：『85 歳以上高齢股関節近位部骨折患者における ADL 改善と身体機能要因の関連性』

2023 年度：『地域高齢者を対象としたスマートフォン利用教室が身体活動量および孤独感に及ぼす影響; ランダム化比較試験』

2022 年度：『大腿骨近位部骨折患者の回復期における QOL と受傷前フレイルとの関連』

2022 年度：『糖尿病を合併する高齢心不全患者の二次性サルコペニアと生活機能について』

2021 年度：『COVID-19 流行中の外出自粛により閉じこもりとなったハイリスク高齢者の特徴と身体活動、腰痛および孤独感への関連性』

2020 年度：『認知症グループホーム入所の中・重度認知症高齢者における姿勢観察の有用性』

2019 年度：『回復期リハビリテーション病院における家族の介助効力感と入院患者の ADL との関連について』

2019 年度：『訪問リハビリテーションにおける多職種の間わりが在宅高齢者の運動遵守率と心身機能に及ぼす影響』

4. 主な論文

- Gen A, Higuchi Y, et al: Intervention for Social Frailty Focusing on Physical Activity and Reducing Loneliness: A Randomized Controlled Trial. *Clinical Interventions in Aging*, 20:43-53, 2025
- Kozuki W, Higuchi Y, et al: Effects of the Internet-based rehabilitation information sharing program on psychological stress of family caregivers of inpatients: A non-randomized controlled study. *Medicine*, 103(29):e38910, 2024
- Gen A, Higuchi Y, et al: Low Back Pain, Lower Physical Activity, and Loneliness Associated with Decreased Frequency of Going Out during COVID-19 in Japanese Older Adults. *International Journal of Gerontology* 17:119-123, 2023
- 平島賢一, 樋口由美, 他: 徳島県在住高齢ドライバーにおける運転免許証自主返納後の活動性の変化と運動機能、認知・精神機能の追跡調査. *日本公衆衛生雑誌*, 69(1), 59-66, 2022
- Murakami T, Higuchi Y, et al: The Magnitude of ADL improvement was associated with discharge home among older stroke patients in a convalescent (Kaifukuki) rehabilitation ward. *Jpn J Rehabil Med* 57:262-270, 2020
- Ando S, Higuchi Y, et al: Custom-Made daily routine increases the number of steps taken by frail older adults. *Journal of Aging and Physical Activity* 12:1-9, 2019

5. 現在の指導している大学院生数

M1: 1 名、M2: - 名、D1: - 名、D2: 1 名、D3: 1 名

6. どのような大学院生の受け入れを希望するか?

本研究内容に興味をもって、現場に役立つ研究に真摯に取り組もうとする熱意ある方を希望します。社会人の方は、月曜日の日中に登校できることが条件となります。

1. 主な研究内容について

誘発筋電図や誘発脳波・経頭蓋磁気刺激・H反射などの神経生理学的手法を用いて、中枢神経疾患ならびに健常者における運動制御を研究しています。最近では姿勢制御、歩行開始時の予測的姿勢制御、小脳による運動制御、眼球運動と上肢運動制御の協応、肢節間協調制御などに関する研究を行っています（詳しくはホームページ参照 <https://motorcontrol.web.fc2.com/>）。平岡研究室では、できる限り厳密な手法を用いて実験を行い、国際誌への掲載を狙える高度な研究成果の生成を狙います。大学院生はこれらの研究活動を主たる研究者として展開することにより、高度な研究スキルとスタイルを身につけます。院生はそれまでの自分の研究体験とはかなり異なる平岡研究室独自の研究プロセスを体験することになると思います。大学院修了後は、大学院での研究生活を通して身につけた研究手法・スタイルを活かし、独自の研究テーマを設定して独立して研究していくことが最終目標になります。

2. 主な共同研究先

3. 今まで指導した学位論文名

<博士論文>

2024 年度：『Time cost for change in motor response set』

2022 年度：『Tactile perception of right middle fingertip suppresses excitability of motor cortex supplying right first dorsal interosseous muscle』

2016 年度：『Interhemispheric inhibition between the primary sensory and contralateral primary motor cortices』

2015 年度：『The effect of tonic contraction of one hand muscle on motor area of tonically contracting another hand muscle』

<修士論文>

2022 年度：『Afferent volleys from digital nerves induce short-latency facilitation of perceptual sensitivity and primary sensory cortex excitability』

4. 主な論文

- Otsuka, S., Gao, H., & Hiraoka, K. (2024). Contribution of external reference frame to tactile localization. *Experimental Brain Research*, 242(8), 1957-1970.
- Tsujinaka, R., Oda, H., Fukuda, S., Hamada, N., Matsuoka, M., & Hiraoka, K. (2023). Afferent volley from the digital nerve induces short-latency facilitation of perceptual sensitivity and primary sensory cortex excitability. *Experimental Brain Research*, 241(5), 1339-1351.
- Oda, H., Tsujinaka, R., Fukuda, S., Sawaguchi, Y., & Hiraoka, K. (2022). Tactile Perception of Right Middle Fingertip Suppresses Excitability of Motor Cortex Supplying Right First Dorsal Interosseous Muscle. *Neuroscience*, 494, 82–93.
- Hiraoka, K., Ito, S., Lutton, M., Nakano, M., & Yonei, N. (2020). Long-term practice of isolated finger movements reduces enslaved response of tonically contracting little finger abductor to tonic index finger abduction. *Experimental Brain Research*, 238(2), 499-512
- Hiraoka, K., Kinoshita, A., Kunimura, H., Matsuoka, M., & Hamada, N. (2017). Postural perturbation does not reset stepping rhythm in humans, but brief intermission does. *Experimental Brain Research*, 235(12), 3561-3572.
- Jono Y, Iwata Y, Mizusawa H, Hiraoka K. (2016) Change in Excitability of Corticospinal Pathway and GABA-Mediated Inhibitory Circuits of Primary Motor Cortex Induced by Contraction of Adjacent Hand Muscle. *Brain Topography* 29(6):834-846.
- Yoshimura A., Matsugi A., Ezaki Y., Nakagaki K., Hiraoka K. (2010). Blind humans rely on muscle sense more than normally sighted humans for guiding goal-directed movement., *Neuroscience Letters*, 471, 171-174.

5. 現在指導している大学院生数

M1：1名 D2：1名

6. どのような大学院生の受け入れを希望するか？

国際水準の運動制御研究に参加し、将来自分の分野にそれを活かして高度な研究を展開したいという、高い志のある方の入学をお待ちしています。full-time の院生および主に社会人を対象とした part-time の院生を受け入れています。私どもの研究室に関心のある方はまずはメールにてご相談ください。大多数の院生は健常者を対象に運動制御の研究をしていますが、臨床研究を希望する方も受け入れています。臨床研究の場合、実際に研究ができる環境があるかどうかポイントになりますので、ご希望がある場合は研究環境を聞かせていただきながらどんな指導・研究体制が適切か検討させていただきます。

1. 主な研究内容について

・運動機能回復学講座

医学的リハビリテーションの中核をなす理学療法学分野において、最も中心となる治療技術と理論の体系が運動療法学です。運動機能回復学講座では、運動療法学を研究分野の中心に据え、身体運動機能障害の評価と治療ならびに予防に資することを目的に研究を行っています。具体的には、筋力増強運動や伸張運動における筋の機能的変化、関節疾患や加齢による運動機能低下とその回復手段の開発、歩行能力向上や転倒予防について、特に重心移動能力に着目した研究活動を行っています。

2. 主な共同研究先

大阪急性期・総合医療センター，大阪大学医学部附属病院

3. 今まで指導した学位論文名（2020年度以降）

〈博士論文〉

2022年度：『着地衝撃に関与する筋力発揮能力の検討』

〈修士論文〉

2020年度：『下腿骨折後患者のアキレス腱の伸張性変化およびストレッチング効果に関する超音波画像による検討』

2021年度：『抵抗歩行が体幹筋活動と歩行パラメータに及ぼす影響』

『歩行時の体幹動揺に対する Hip walking の即時的効果』

『カーブ走における脛骨加速度と関節角度に対する足底板の影響について』

2022年度：『Short foot exercise が衝撃吸収機能と運動機能に及ぼす即時効果の検討』

『Static stretching が筋力および筋量に及ぼす効果の検討』

2024年度：『サイドステップ動作と下肢筋同時収縮の関連』

4. 主な論文・著書

- ・河村廣幸，小柳磨毅，淵岡聡：ここがポイント！整形外科疾患の理学療法 第3版，金原出版，2023
- ・淵岡聡：腰部脊柱管狭窄症の理学療法，福井勉ほか編：標準理学療法学 専門分野 骨関節理学療法学 第2版，医学書院，218-231，2021
- ・淵岡聡：下肢切断者のリハビリテーション，上月正博ほか編：Crosslink basic リハビリテーションテキスト リハビリテーション医学，メジカルビュー社，328-334，2021
- ・S Fuchioka, A Iwata, Y Higuchi, et al. : A modified seated side tapping test in which the arms are crossed also reflects gait function in community-dwelling elderly. J. Phys. Ther. Sci, 29: 1598-1602, 2017
- ・淵岡聡，岩田晃：運動器の運動療法とは，小柳磨毅ほか編：運動器の運動療法，羊土社，12-13, 22-27, 2017
- ・淵岡聡ほか編著：今日の理学療法指針，医学書院，2015
- ・Fuchioka S, Iwata A, Higuchi Y, et al. : The forward velocity of the center of pressure in the mid-foot is a major predictor of gait speed in older adults. International Journal of Gerontology, 9(2):119-122, 2015
- ・H Kawamura, S Fuchioka, et al. : Restoring Normal Gait after Limb Salvage Procedures in Malignant Bone Tumours of The Knee. Scandinavian Journal of Rehabilitation Medicine, 31(2): 77-81, 1999

5. 現在指導している大学院生数

M1：1名

6. どのような大学院生の受け入れを希望するか？

- (1) 運動器疾患の理学療法臨床における「印象」や「疑問」の科学的解明・解決にじっくりと取り組む意欲と時間のある方。
- (2) 運動器障害の成因究明やその解決策に役立つ基礎的研究、運動機能障害の解析的研究に興味がある方。

1. 主な研究内容について

実験動物（主にマウス）を用いた解剖生理学的・行動学的実験手法により、以下の神経科学に関する基礎研究を行っています。

1) シナプス新生を活性化するメカニズムの解明と神経機能回復への応用

シナプスは成熟期にも活発に新生と消失を繰り返しています。我々が海馬で発見したシナプス新生促進シグナル経路の薬物による活性化や運動療法との併用で学習・運動機能を改善できるかどうかを検討し、神経細胞を興奮させることなくシナプスを新生させることで脳機能障害からの回復を効果的に促進する新たな神経機能回復法の樹立を目指しています。

2) 尿路系・消化器系の内臓感覚伝達機構の解明と内臓知覚過敏緩和への応用

膀胱や消化管の粘膜上皮は、膨張するとATPを分泌して伸展感覚を中枢神経系に伝達し、尿意や便意、内臓痛などの内臓感覚を引き起こします。このATP分泌に対する薬剤や運動の効果を検明することで、尿路系・消化器系の機能的疾患（過活動膀胱・過敏性腸症候群など）に伴う内臓知覚過敏（尿意切迫感・慢性腹痛など）を改善する可能性を検討しています。

2. 主な共同研究先

大阪大学大学院医学系研究科（神経細胞生物学講座）

3. 今まで指導した学位論文名

〈博士論文〉

2023年度：『強心配糖体 Digoxin 投与による Na/K ATPase 活性化が樹状突起スパイン新生および運動学習に与える影響』

〈修士論文〉

2024年度：『運動負荷が膀胱・直腸の粘膜上皮からのATP分泌に及ぼす影響の検証』

2023年度：『ジゴキシンとデセン酸エチルエステルが運動学習や運動機能回復に及ぼす効果』

2022年度：『膀胱および直腸からの内臓感覚伝達に対するエンドカンナビノイド経路の作用と有酸素運動の効果』

2020年度：『頸椎アライメントの変化にともなう頸部屈伸筋群の拮抗関係および深層浅層筋関係』

2019年度：『Na/K ポンプ活性の調節による樹状突起スパイン新生が記憶・運動学習に与える影響』

4. 主な論文

- Hashimoto J., Matsumoto-Miyai K., et al. : Effects of cardiac glycoside digoxin on dendritic spines and motor learning performance in mice, *Neuroscience*, 541, 77-90, 2024
- Okuyama E., Matsumoto-Miyai K., et al. : The nitric oxide-cyclic guanosine monophosphate pathway inhibits the bladder ATP release in response to a physiological or pathological stimulus, *Physiological Reports*, 9, e14938, 2021
- Matsumoto-Miyai K., et al. : Serotonergic regulation of distention-induced ATP release from the urothelium, *American Journal of Physiology Renal Physiology*, 310, F646-F655, 2016
- Takezawa K., Matsumoto-Miyai K., et al. : Authentic role of ATP signaling in micturition reflex, *Scientific Reports*, 6, 19585, 2016
- Sonderegger P., Matsumoto-Miyai K. : Activity-controlled proteolytic cleavage at the synapse, *Trends in Neurosciences*, 37, 413-423, 2014
- Matsumoto-Miyai K., et al. : Coincident pre- and postsynaptic activation induces dendritic filopodia via neurotrophin-dependent agrin cleavage, *Cell*, 136, 1161-1171, 2009

5. 現在の指導している大学院生数

M2：1名、D2：1名

6. どのような大学院生の受け入れを希望するか？

リハビリテーションの基盤となる神経可塑性や内臓知覚伝達に関する基礎的実験研究に興味のある方で、実験動物を用いた研究に抵抗のない方を希望します。また、実験の関係上、研究実施日は日を選べないことも多いので、平日に実験を実施する時間を取れる方でないと指導は困難であることをご承知おきください。

1. 主な研究内容について

- ・フレイルを中心とした老年症候群への対策を検討するための疫学研究を行っています。健康行動、特に身体活動の変容や継続に焦点を当て、それらをサポートする要因や介入戦略について、コホート研究やランダム化比較試験により調査しています。
- ・対象者は地域在住高齢者が中心ですが、65歳未満の中老年者を対象に、糖尿病をはじめとした慢性疾患のセルフケアに関する研究も行っています。
- ・また、自治体との共同研究として、介護予防事業の効果検証に携わっており、社会課題解決に資する研究成果の創出を目指しています。

2. 主な共同研究先

筑波大学介護予防研究室、国立長寿医療研究センター老年学・社会科学研究センター予防老年学研究部、富山県立大学工学部／看護学部、産業技術総合研究所人間拡張研究センター運動機能拡張研究チーム、兵庫医科大学予防理学療法研究室
大阪府羽曳野市、豊中市、熊取町

3. 今まで指導した学位論文名

<博士論文>

なし

<修士論文>

2024年度：『Association of Frailty Assessed by the Kihon Checklist upon the Readmission of Older Patients with Heart Failure』

『Health literacy and patient-reported outcomes in preoperative patients undergoing lumbar spine surgery: a cross-sectional study』

4. 主な論文

- ・ Uemura K, Kamitani T, Watanabe A, Okamoto H, Saho K, Yamada M: Active Learning Through Video Conferencing to Maintain Physical Activity Among Older Adults: A Pilot Randomized Controlled Trial. *J Aging Phys Act* 2024;1-9.
- ・ Uemura K, Kamitani T, Watanabe A, Okamoto H, Yamada M: Association between community-level health literacy and frailty in community-dwelling older adults. *Aging Clin Exp Res* 2023, 35(6):1253-1261.
- ・ 上村一貴, 山田実, 紙谷司, 渡邊敦也, 岡本啓: 高齢者のヘルスリテラシーが2年後のフレイルの有無に及ぼす影響—前向きコホート研究—. *日本老年医学会雑誌* 2021, 58(1):101-110
- ・ Uemura K, Doi T, Tsutsumimoto K, Nakakubo S, Kim MJ, Kurita S, Ishii H, Shimada H: Predictivity of bioimpedance phase angle for incident disability in older adults. *J Cachexia Sarcopenia Muscle* 11(1):46-54, 2020
- ・ Uemura K, Yamada M, Okamoto H: Effects of Active Learning on Health Literacy and Behavior in Older Adults: A Randomized Controlled Trial. *J Am Geriatr Soc* 66(9):1721-1729, 2018

5. 現在の指導している大学院生数

M1:1名、D1:1名

6. どのような大学院生の受け入れを希望するか?

研究の方法論に関する学習からデータ収集、論文での成果発表まで、主体的に取り組める方を希望します。

フレイルや行動変容をテーマとした研究が多く行われていますが、対象とする疾患や領域は特に限定しません。所属施設をフィールドとした研究、または研究室のプロジェクトに参加する形での研究、いずれの形式でも可能です（応相談）。ご自身のフィールドで研究を実施される場合、専門領域の知識習得は基本にご自身に委ね、教員は研究計画や分析をサポートします。

1. 主な研究内容について

重度障がい者の社会参加支援を大きなテーマとして、これまでに、頸髄損傷者の自動車への移乗動作の分析や障がい者スポーツに関する研究に取り組んできました。特に重度の障がい者スポーツ選手の競技パフォーマンス向上については、まだまだエビデンスが確立されていない事も多いため、パフォーマンスの指標を確立することや、効果的なトレーニング方法について検証し、科学的な根拠に基づき、選手のパフォーマンス向上に関する取り組みを行っていきたいと考えています。

現在は、パラリンピック競技の中でも最重度の障がい者が対象となっている「ボッチャ」を中心に関わっており、ボッチャ選手の競技パフォーマンス向上のための研究を行っています。また、誰でも気軽にできるボッチャの競技特性を活かし、高齢者を含む様々な対象者の新しいリハビリテーションプログラムとしての有用性についても検証を行っています。

2. 主な共同研究先

一般社団法人日本ボッチャ協会
株式会社ワントゥーテン 他

3. 今まで指導した学位論文名

〈博士論文〉

2023年度 『重度脳性麻痺ボッチャ選手に対する寝返り動作の反復によるトレーニング効果』

〈修士論文〉

2022年度 『ボッチャ BC3 選手のポインター選択のルール抽出と選択指標の検討』

2023年度 『座面傾斜がボッチャの競技パフォーマンスに与える影響について』

2023年度 『投球前の上肢スイングがボッチャの競技パフォーマンスに与える影響について』

4. 主な論文

- [Kataoka M, Sugiyama K, Iwata A, et al.](#) : Is Boccia XR an enjoyable and effective rehabilitation exercise for older adults?, PLOS ONE, 20, e0340369, 2025.
- [Yahagi K, Kataoka M, Ichiba T, et al.](#) : Training effect of repeated rolling motions on boccia players with severe cerebral palsy: Comparison with the effect of conventional upper-limb training though a crossover test, Journal of Physical Therapy Science, 36, 245-251, 2024.
- [Kataoka M, Yahagi K, Sugano H, et al.](#) : Relationship between throwing distance, shoulder joint range of motion, and upper limb muscle strength in boccia athletes: A preliminary study, Scientific Journal of Sport and Performance, 2, 454-460, 2023.
- [Kataoka M, Okuda K, Iwata A, et al.](#) : Throwing distance and competitive performance of Boccia players, The Journal of Physical Therapy Science, 32, 574-577, 2020.
- [Kataoka M, Yasuda T, Okuda K, et al.](#) : Movement strategies during car transfers in individuals with tetraplegia, a preliminary study, Spinal Cord, 50, 440-445, 2012.

5. 現在の指導している大学院生数

なし

6. どのような大学院生の受け入れを希望するか?

障がい者支援に興味があり、特に実践的なフィールドでの活動を通して障がい者スポーツの研究に携わりたいと考えている方を希望します。

1. 主な研究内容について

リハビリテーション学と建築学の融合を果たす研究を行っています。「住マイルリハビリテーション®」学の構築を目指して、転倒予防に関する研究等に取り組んでいます。主な研究テーマは、「高齢者の転倒予防」、「福祉住環境整備」です。

具体的には、急性期病院の退院患者に対する自宅見取り図を用いた再転倒予防指導の有効性に関する多施設共同研究の遂行や、UR 都市機構のモデルルーム改修事業へ参画（「転倒予防・介護予防のお部屋」を監修）すること等で、退院患者や地域在住高齢者の豊かな生活に寄与すべく活動を行っています。得られた成果や知見に対して、社会的認知及び普及を促進させ、それに向けての政策立案を支援していきたいと考えております。

※「住マイルリハビリテーション」は公立大学法人大阪の登録商標です（2022年4月14日に商標登録）。

高齢者や障がい者へ向けての住環境の提案や、在宅でのリハビリテーションの助言・提案を行っていく概念。

2. 主な共同研究先

本学生活科学研究科（居住環境学分野）

八尾徳洲会総合病院、徳洲会グループ

UR 都市機構

株式会社 ORPHE

NPO 法人 すまいるセンター

羽曳野市保健福祉部

3. 今まで指導した学位論文名

<博士論文>

なし

<修士論文>

なし

4. 主な論文

- Ueda T, Higuchi Y, Murakami T, Kozuki W, Hattori G, Nomura H: Fall prevention program using home floor plans in an acute-care hospital: a preliminary randomized controlled trial. *International Journal of Environmental Research and Public Health*, 9(17), 1-9, 2022.
- 上田哲也: 【地域のなかの豊かな活動を育む】地域のなかで、「リハビリ」×「建築」の融合を図る. *日本転倒予防学会誌*, 9(1), 15-16, 2022.
- Ueda T, Higuchi Y, Hattori G, Nomura H, Yamanaka G, Hosaka A, Sakuma M, Fukuda T, Fukumoto T, Nemoto T: Effectiveness of a tailored fall-prevention program for discharged older patients: a multicenter, preliminary, randomized controlled trial. *International Journal of Environmental Research and Public Health*, 19(3), 1-9, 2022.
- 上田哲也: 退院前患者に対する自宅内転倒予防介入. *地域ケアリング*, 23(3), 77-80, 2021.
- Ueda T, Higuchi Y, Imaoka M, Todo E, Kitagawa T, Ando S: Tailored education program using home floor plans for falls prevention in discharged older patients: a pilot randomized controlled trial. *Archives of Gerontology and Geriatrics*, 71, 9-13, 2017.

5. 現在の指導している大学院生数

なし

6. どのような大学院生の受け入れを希望するか？

リハビリテーション学と建築学の融合に関心があり、研究に対して、真摯に取り組もうとする熱意ある方を希望します。職種は問いません。得られた成果や知見を、積極的にアウトプットしていくことを目標とします。

我々とともに、「住マイルリハビリテーション®」学の構築を目指して、進めていきましょう。

1. 主な研究内容について

- 1) 内部障害リハビリテーション
循環器・代謝疾患等の内部障害患者における身体および認知機能に関する研究
- 2) 急性期リハビリテーション
急性期病院における疫学ならびにリハビリテーションアプローチの研究
- 3) 在宅介護者を対象とした介護負担感に関する研究
- 4) 地域在住高齢者を対象とした介護予防に関する研究

2. 主な共同研究先

筑波大学介護予防研究室、大阪府豊中市、名古屋大学、カリフォルニア大学アーバイン校、聖マリアンナ医科大学病院、川崎市立多摩病院

3. 今まで指導した学位論文名

なし

4. 主な論文

- [Otoabe Y.](#) Current Status of the Cognitive Impairment in Chronic Kidney Disease. *Phys Ther Res.* 2024;27(3):115-120.
- [Otoabe Y.](#), Kimura Y, Terao Y, Suzuki M, Tanaka S, Kojima I, Koyama S, Kusumi H, Yamada M. Associations between caregiver burden and care receivers' sharing ratio of household tasks among spousal caregivers. *Geriatr Gerontol Int.* 2023; 23(8):616-621.
- [toabe Y.](#), Rhee CM, Nguyen M, Kalantar-Zadeh K, Kopple JD. Current status of the assessment of sarcopenia, frailty, physical performance and functional status in chronic kidney disease patients. *Curr Opin Nephrol Hypertens.* 2022;31(1):109-128.
- [Otoabe Y.](#), Kimura Y, Suzuki M, Koyama S, Kojima I, Yamada M. Factors Associated with Increased Caregiver Burden of Informal Caregivers during the COVID-19 Pandemic in Japan. *J Nutr Health Aging.* 2022;26(2):157-160.
- [Otoabe Y.](#), Yamada M, Hiraki K, et al. Physical Exercise Improves Cognitive Function in Older Adults with Stage 3-4 Chronic Kidney Disease: A Randomized Controlled Trial. *Am J Nephrol.* 2021;52(12):929-939.
- [Otoabe Y.](#), Suzuki M, Kimura Y, et al. Relationship between expression of gratitude by home-based care receivers and caregiver burden among family caregivers. *Arch Gerontol Geriatr.* 2021;97:104507.
- [Otoabe Y.](#), Hiraki K, Izawa KP, Sakurada T, Shibagaki Y. Relationship between serum inorganic phosphorus levels and cognitive decline over 2 years in older adults with pre-dialysis chronic kidney disease. *Clin Exp Nephrol.* 2020;24(3):286-287.
- [Otoabe Y.](#), Hiraki K, Hotta C, Izawa KP, Sakurada T, Shibagaki Y. The impact of the combination of kidney and physical function on cognitive decline over 2 years in older adults with pre-dialysis chronic kidney disease. *Clin Exp Nephrol.* 2019;23(6):756-762.
- [Otoabe Y.](#), Hiraki K, Hotta C, et al. Mild cognitive impairment in older adults with pre-dialysis patients with chronic kidney disease: Prevalence and association with physical function. *Nephrology (Carlton).* 2019;24(1):50-55.

5. 現在の指導している大学院生数

M1 : 2名、M2 : 1名

6. どのような大学院生の受け入れを希望するか？

臨床現場もしくは地域における課題解決を目的とした研究に従事できる社会人の受け入れを希望します。職種・対象疾患・研究経験は問いませんが、基本的にはご自身の臨床現場・地域でデータを収集していただくことを前提とします。研究成果は国際誌への掲載を目標とします。

1. 主な研究内容について

三次元動作解析装置や床反力計・筋電図などを用いて、スポーツ動作（着地動作・走行）や歩行動作などのバイオメカニクスの研究を行っています。健常者やスポーツ傷害患者・高齢者と幅広い対象に対して基礎研究・臨床研究を実施しています。

現在は、以下のテーマで研究を進めています。

1) 着地衝撃に関与する新たな神経筋機能の探索

共同研究先と共に、片脚ドロップジャンプ着地の評価方法を開発し、健常者での基礎的研究から患者さんでの臨床研究を行なっています。スポーツ傷害の受傷機転として多い着地動作を簡便に客観的に評価し、傷害発生に関与する要因分析やリハビリテーションプログラムの検討を行なっています。

2) XR 技術を用いた新しいリハビリテーションの開発

企業と共同して、XR 技術を用いた新しい歩行リハビリテーションプログラムを開発しています。プロトタイプの実験が完了し、現在はバイオメカニクスの解析を行い安全性や効果検証に取り組んでいます。今後は、健常若年者・健常高齢者・患者さんへと研究対象を広げて、社会実装を目指しています。

2. 主な共同研究先

大阪大学医学部附属病院、株式会社ワントゥーテン、大阪公立大学大学院医学系研究科

3. 今まで指導した学位論文名

なし

4. 主な論文

- Kataoka M, Sugiyama K, Iwata A, et al. : Is Boccia XR an enjoyable and effective rehabilitation exercise for older adults?, PLOS ONE, 20, e0340369, 2025.
- Sugiyama K, Fuchioka S, Kimura Y, Iwata A, Nakata K, Mae T : The ability to produce a timely explosive force may affect loading rate at landing. Sports Sciences for Health, 19, 1163-1168, 2023
- Takata Y, Sugimoto M, Iwamoto K, Kistunai I, Sugiyama K, Kimura K : Medial Longitudinal Arch Pad Influences Landing Control of the Lower Limbs during Single-Leg Jump-Landing. Health, 12, 1610-1619, 2020.
- 杉山恭二, 木村佳記, 淵岡聡, 前達雄, 中田研 : 着地衝撃に関与する膝伸展筋機能の検討. J. sports Injury, 24,4-6, 2019.
- 木村佳記, 小笠原一生, 杉山恭二, 中田研 : 片脚ドロップジャンプ着地テストによる動的バランス評価. 臨床スポーツ医学, 36(5), 492-497, 2019
- 小笠原一生, 小柳好生, 木村佳記, 杉山恭二, 佐藤睦美, 川上由紀子, 中田研 : 片脚着地時の姿勢戦略に基づく非接触型前十字靭帯損傷の潜在的リスク同定. 日本臨床スポーツ医学会誌, 25(3), 346-353, 2017.

5. 現在の指導している大学院生数

M1 : 1名

6. どのような大学院生の受け入れを希望するか?

運動器やスポーツ理学療法の分野に興味があり、新しいことに一緒にチャレンジし、臨床への還元・社会実装に向けて熱心に取り組むことができる方を希望します。

1. 主な研究内容について

女性の健康増進を主な研究テーマとし、若年女性の月経に関連する症状、周産期女性の腰背部の痛みや骨盤底機能障害を中心とした周産期特有の課題に対する調査研究を行っております。研究方法としては質問紙を作成して行うアンケート調査や各種センサを用いた実測実験を実施しています。実測実験では、現在は慣性センサや床反力計を用いた動作解析、筋電図や超音波画像診断装置による筋活動計測等を行っており、これらを用いた評価システムの提案も行っております。

また、医療現場や企業との情報交換および共同開発、国内外にわたる共同研究を積極的に行っており、得られた成果やシステムを社会に還元することを目的に研究を遂行しております。

2. 主な共同研究先

京都大学、慶應義塾大学、医療法人葵鐘会、大阪公立大学医学部付属病院、バリ・サン＝ジョゼフ病院、国際医療福祉大学、株式会社サンデシカ

3. 今まで指導した学位論文名

なし

4. 主な論文

- [Morino S, Ishihara M, Umezaki F, Hatanaka H, Yamashita M, Aoyama T.](#) “History of pain around lumbopelvic region during perinatal period: a prospective cohort study” . Eur Spine J. Online ahead of print. 2024.
- [Morino S, Hirata H, Matsumoto D, Yokota I, Aoyama T.](#) “Patterns of premenstrual syndrome in collegiate women: a cross-sectional study” . Medicine. Vol.101, No.35, pp.1-7. 2022.
- [Morino S, Yamashita M, Umezaki F, Hatanaka H, Takahashi M.](#) “Assessment of Motion and Muscle Activation Impacts on Low Back Pain during Pregnancy Using an Inertial Measurement Unit” . Applied sciences. Vol.10, No.11, pp.1-14. 2020.
- [Morino S, Ishihara M, Umezaki F, Hatanaka H, Yamashita M, Aoyama T.](#) “Pelvic alignment changes during the perinatal period” . PLoS ONE. Vol.14, No.10, pp.1-11, 2019.
- [Morino S, Ishihara M, Umezaki F, Hatanaka H, Yamashita M, Kawabe R, Aoyama T.](#) “The effects of pelvic belt use on pelvic alignment during and after pregnancy: a prospective longitudinal cohort study” . BMC Pregnancy and Childbirth. Vol.19, No. 305, pp.1-9, 2019.

5. 現在の指導している大学院生数

M1：1名、M2：2名

6. どのような大学院生の受け入れを希望するか？

主な研究テーマは若年層から高齢層までの幅広い女性の健康増進です。これに加えて動作解析等のバイオメカニクスの研究も行っております。これらの研究に対して、高い意欲と研究を遂行する忍耐力のある方を募集いたします。また、研究にお時間を割くことができる、チャレンジ精神のある方を募集しておりますので、ぜひ事前にご連絡・ご相談ください！

■リハビリテーション学研究科 リハビリテーション学専攻 作業療法学領域

作業療法学領域では、高次脳機能、脳卒中後の上肢機能、遠隔リハビリテーション、重度認知症、発達障害、精神障害、難病、がん、高齢者の認知機能低下予防、作業科学など、基礎から臨床まで暮らしを基盤とした幅広い研究に取り組んでいます。

博士前期課程 教員連絡先及び主な研究分野（2025年4月現在）

名前	職名	アカウント	主な研究分野
石井 良平	教授	rishii	臨床神経生理学（脳波）、精神科リハビリテーション
竹林 崇	教授	takshi77	脳卒中後上肢麻痺のリハビリテーション
立山 清美	教授	tateyama	発達障害の作業療法、特別支援教育と作業療法、家族支援
内藤 泰男	教授	naitoh	認知・行為障害の作業療法、臨床神経生理学(特に事象関連電位)
横井 賀津志	教授	yokoikat	高齢者の認知機能低下予防、転倒予防、作業科学
田中 寛之	准教授	hytanaka	認知症、高齢期作業療法、高次脳機能障害
井上 貴雄	講師	inouet	認知神経科学（脳波）、認知機能、精神科リハビリテーション
上田 将也	講師	uedam	臨床神経生理学（脳波）、高次脳機能障害、後天性脳損傷者のリハビリテーション
小島 久典	講師	kojimaotr	身体障害作業療法（日常生活動作）、福祉用具、障がい者の災害対策
田中 宏明	講師	h-tanaka	統合失調症の認知機能、内受容感覚
中岡 和代	講師	nakaoka	こども/神経発達症の作業療法、インクルーシブ教育と作業療法、食行動支援、尺度開発

- 連絡は電子メールでお願いいたします。
- メールアドレスは、アカウント@omu.ac.jp になります。

■リハビリテーション学研究科 リハビリテーション学専攻 作業療法学領域

博士後期課程 教員連絡先及び主な研究分野 (2025年4月現在)

名前	職名	アカウント	主な研究分野
石井 良平	教授	rishii	臨床神経生理学(脳波)、精神科リハビリテーション
竹林 崇	教授	takshi77	脳卒中後上肢麻痺のリハビリテーション
立山 清美	教授	tateyama	発達障害の作業療法、特別支援教育と作業療法、 家族支援
内藤 泰男	教授	naitoh	認知・行為障害の作業療法、臨床神経生理学(特に事象関連電位)
横井 賀津志	教授	yokoikat	高齢者の認知機能低下予防、転倒予防、作業科学
田中 寛之	准教授	hytanaka	認知症、高齢期作業療法、高次脳機能障害

- 連絡は電子メールでお願いいたします。
- メールアドレスは、アカウント@omu.ac.jp になります。

1. 主な研究内容について

脳波、脳磁図、ニューロモデュレーションなどの神経生理学的手法を、作業療法の効果判定・予測・増強に応用できればと考えています。

2. 主な共同研究先

大阪大学精神科・脳神経外科・高等共創研究院・薬学部、順天堂大学、大阪保健医療大学、大阪河崎リハビリテーション大学、国立精神・神経医療研究センター

3. 今まで指導した学位論文名

<博士論文>

2023 年度：『Jumping to conclusions correlates with negative symptoms, poor response inhibition, and impaired functioning in individuals diagnosed with schizophrenia』

2025 年度：『Relationship between personal recovery, autobiographical memory, and clinical recovery in people with mental illness in the acute phase』

『Social Buffering Effects during Craft Activities in Parallel Group Session Revealed by EEG Analysis and Parasympathetic Activity』

<修士論文>

2023 年度：『シート型脳波計による α 波の測定と解析』

2025 年度：『ワーキングメモリ負荷に伴う自律神経活動の変化』

4. 主な論文

- Neurophysiological effects of altruistically motivated craft activities in occupational therapy: A pilot study using frontal EEG and heart rate variability analysis. Orui J, Shiraiwa K, Inoue T, Ueda M, Ueno K, Naito Y, Ishii R. Hong Kong J Occup Ther. 2025 Feb 17:15691861251319466. Current source density and functional connectivity extracted from resting-state electroencephalography as biomarkers for chronic low back pain. Ueno K, Yamada K, Ueda M, Naito Y, Ishii R. Pain Rep. 2025 Jan 13:10(1):e1233.
- Unraveling the neurophysiological intricacies of stuttering through sensorimotor oscillations. Ishii R, Ueda M. Clin Neurophysiol. 2025 Jan;169:74-75.
- EEG Oscillatory Activity and Resting-State Networks Associated with Neurocognitive Function in Mild Traumatic Brain Injury. Ueda M, Ueno K, Yuri T, Aoki Y, Hata M, Inoue T, Ishii R, Naito Y. Clin EEG Neurosci. 2024 Oct 18:15500594241290858.
- Psychophysiological and interpersonal effects of parallel group crafting: a multimodal study using EEG and ECG. Orui J, Shiraiwa K, Tazaki F, Inoue T, Ueda M, Ueno K, Naito Y, Ishii R. Sci Rep. 2024 Aug 2:14(1):17883.
- Editorial: Translational research of occupational therapy and neurorehabilitation. Ishii R, Smith SA, Iwanaga R, Xiang J, Canuet L, Miyaguchi H, Inadomi H. Front Hum Neurosci. 2024 Jun 7;18:1432073.
- Effects of real-time VR clinical practice on reducing the stigma toward dementia among students of occupational therapy: A randomized controlled trial. Ueno K, Tanaka H, Niki K, Ueda M, Tanaka A, Yokoi K, Naito Y, Ishii R. PCN Rep. 2023 Dec 3;2(4):e160.
- Editorial: Translational research of occupational therapy and neurorehabilitation, volume II. Ishii R, Kirimoto H, Yoshimura M, Tabira T. Front Hum Neurosci. 2024 May 29;18:142648.
- Relationship between personal recovery, autobiographical memory, and clinical recovery in people with mental illness in the acute phase. Mori T, Hattori R, Irie K, Tsurumi K, Murai T, Ishii R, Inadomi H. Heliyon. 2024 Feb 13;10(4):e26075.

5. 現在の指導している大学院生数

M1：1名、D1：1名、D3：4名

6. どのような大学院生の受け入れを希望するか？

自ら課題を見つけて研究をデザインし、データを集めて解析し、英語で発表するという過程をサポートします。将来的に研究・教育に携わっていきたくて考えている方だけではなく、臨床で頑張っていきたいという方々こそぜひ気軽にご相談ください。

1. 主な研究内容について

主に脳卒中後の上肢麻痺に対する治療手段である Constraint-induced movement therapy (CI療法) やそれらに複合的に実施する電気刺激療法、装具療法、ボツリヌス毒素 A 型施注、ロボット療法などについて研究している。また、研究デザインとしては、介入研究が主であり、脳卒中後の上肢麻痺におけるアプローチの開発、実証に関して研究している。なお、脳卒中における Evidence based practice や目標設定、意思決定などについても今後検討していく予定である。

2. 主な共同研究先

帝人株式会社、株式会社メグウェル、株式会社 Meltin MMI、株式会社 LIFESCAPES、株式会社マイナビ、株式会社リハテックリンクス、東京工科大学、吉備国際大学、六心会伊丹恒生脳神経外科病院、他、多数の医療機関

3. 今まで指導した学位論文名

〈博士論文〉

Incidence and lesions causative of delusional misidentification syndrome after stroke

Development of the Japanese version of the awareness questionnaire for assessment of self-awareness after acquired brain injury: reliability and validity.

〈修士論文〉

脳卒中後上肢麻痺に対する評価法「Fugl-Meyer Assessment (FMA)」の上肢項目における潜在ランク数の推定

脳卒中後上肢麻痺に対する治療選択；本邦の理学療法士・作業療法士に対する質問紙を用いた横断研究
等

4. 主な論文

- Kajimoto C, Takebayashi T, Okita Y, Fleming J, Shimada S. Development of the Japanese version of the awareness questionnaire for assessment of self-awareness after acquired brain injury: reliability and validity. Topics in stroke rehabilitation 31: 372-380, 2024
- Takeuchi K, Takebayashi T, Hanioka D, Okita Y, Shimada S. Comparison of tendon and muscle belly vibratory stimulation in the treatment of post-stroke upper extremity spasticity: a retrospective observational pilot study. Scientific reports 14: 4151, 2024
- Kaneko T, Maeda M, Yokoyama H, Kai S, Obuchi K, Takase S, Horimoto T, Shimada R, Moriya T, Ohmae H, Amanai M, Okita Y, Takebayashi T. Therapeutic effect of adjuvant therapy added to constraint-induced movement therapy in patients with subacute to chronic stroke: a systematic review and meta-analysis. Disability and Rehabilitation 1-15, 2023
- Uchiyama Y, Takebayashi T, Takahashi K, Amano S, Goshō M, Sakai M, Hashimoto K, Hachisuka K, Domen K. Estimating the minimal clinically important difference of upper extremity outcome measures in chronic stroke patients with moderate to severe impairment: a cross-sectional study. Topics in stroke rehabilitation, 2023
- Takebayashi T, Uchiyama Y, Okita Y, Domen K: Development of a program to determine optimal settings for robot-assisted rehabilitation of the post-stroke paretic upper extremity: a simulation study. Scientific Reports 13: 9217, 2023
- Takebayashi T, Takahashi K, Amano S, Goshō M, Sakai M, Hashimoto K, Hachisuka K, Uchiyama Y, Domen K. Robotic-assisted training as self-training for upper-limb hemiplegia in chronic stroke: a randomized controlled trial. Stroke 53: 2182-2191. 2022

5. 現在の指導している大学院生数

M1: 2名、M2: 1名、D1: 1名、D2: 2名、D3: 3名

6. どのような大学院生の受け入れを希望するか？

脳卒中関連（特に上肢麻痺や上肢に関わる障害）のテーマを持っている方を推奨します。また、在学期間中はデータ取得や論文執筆などにエフォートを割ける方を望みます。

1. 主な研究内容について

発達障害領域の作業療法を専門にしています。発達障害の方の作業療法相談、学校支援などの経験をもとに、臨床につながる研究をモットーにしています。

自閉スペクトラム症の方の抱える日常生活の困難さの背景には、感覚・運動の問題が潜んでいることが多く、感覚・運動面に着目した支援・研究を行っています。現在取り組んでいるのは、「幼児期の自閉スペクトラム症児の感覚統合療法の効果」「高等学校の通級指導における協働：作業療法士によるコンサルテーション・モデルの開発（科研・分担研究者）」「自閉症スペクトラム児の食に関する行動障がいへの支援法の開発」「将来を見据えた学齢期のダウン症児の支援」などです。また、所属の大学院生には、脳性麻痺児の運動機能とADLの関係、脳性麻痺児の養育者の介護負担を研究テーマに取り組んでいる人もいます。

2. 主な共同研究先

日本感覚統合学会効果研究委員会（東京都立大学の研究者と感覚統合療法の効果に関する共同研究）
 県立福島医科大学保健科学部

3. 今まで指導した学位論文名

<博士論文>

2017年度：「自閉スペクトラム症児の偏食に関する研究-偏食がある子どもの保護者の自己効力感尺度と保護者向け講座の開発-」

2023年度：「知的障害区分の特別支援学校における作業療法士による学校コンサルテーションの有効性」

<修士論文>

2014年度：「自閉スペクトラム症児の箸操作の困難さに関する研究」

「自閉スペクトラム症児の口腔機能と偏食に関する研究」

2020年度：「重複障害のある子どもの共同注意に関する研究」

2021年度：「児童発達支援事業所に通う幼児と定型発達児の手洗いにける比較」

2022年度：「学齢期発達障がい児の読みにおける眼球運動と姿勢・平衡機能および両側運動協調」

4. 主な論文

- ・ Kurasawa S, Tateyama K, Iwanaga R, Tanba R, Fujita T : Structural relationships between behavioral problems, sensory processing traits and sleep in preschoolers. *American Journal of Occupational Therapy*, 78(1), 2024,
- ・ Harada S, Tateyama K., Kurasawa S., Tanba H., Nakaoka K., Kawasaki I, Nagai K. Characteristics of Occupational Therapists' Advice in School Consultations: Content analysis of advice for consultation on problematic behavior in a special needs school for intellectual disability. *Asian Journal of Occupational Therapy*, 19:153-160, 2023.
- ・ Nakaoka K, Takabatake S, Tateyama K, Kurasawa S, Tanba H, Ishii R, Higashi Y, Kaneda T : Structural Validity of the Mealtime Behaviour Questionnaire for Children with Autism Spectrum Disorder in Japan: *J Phys Ther Sci*, 32(5), 352-358, 2020.
- ・ 立山清美, 中岡和代, 石井良和, 山田孝, 太田篤志：青年・成人用感覚チェックリストの開発 - 妥当性と信頼性の検討 -, *作業療法*, 37 (5), 518-528, 2018.
- ・ Miya-jim A, Tateyama K, Fuji S, Nakaoka K, Higaki K : Development of an Intervention Programme for Selective Eating in Children with Autism Spectrum Disorder.. *Hong Kong Journal of Occupational Therapy*, 30, 22-32, 2017.
- ・ 立山清美, 伊藤 祐子, 赤松 めぐみ, 有川 真弓, 山田 孝, 山西葉子：感覚統合療法の効果研究の現状と効果研究に用いる指標. *感覚統合研究* 16(1), 1-7, 2016.

5. 現在の指導している大学院生数

M2：4名、D3：1名

6. どのような大学院生の受け入れを希望するか？

発達障害領域の作業療法、家族支援などを研究テーマにする方を歓迎します。発達障害のある方への支援が、広く取り込まれるようになってきました。しかしながら、発達障害のある方への支援の効果研究、ADLに関する研究など様々な研究課題がある領域です。社会人の場合は、研究したいことが明確で、ある程度の計画をもっていること、フィールドの確保ができることが必要かと思います。一緒に研究に取り組みましょう！

1. 主な研究内容について

高次脳機能障害がもたらす日常生活活動における障害、特に復職に関する評価に関心を持っています。その評価手法としては、これまでの作業療法で用いられることが多かった行動観察や神経心理学的検査法に加えて、神経生理学的手法（事象関連電位）を用いています。何故、神経生理学的手法を用いているかの理由は、2点あります。第1にこの手法は1960年代に開発された古い手法ですが、既に多くの研究者に用いられ知見が蓄積されていること、第2に臨床で簡便に課題を遂行している対象者の脳機能評価を行うことが出来るからです。つまり作業療法の臨床において、作業中(特に刺激を鑑別する段階)の脳の情報処理過程に関して、比較的簡便に信頼性のある評価をすることが出来るのです。

いろいろなテーマに取り組んできましたが、どちらかといえば応用的な（日常生活と関係の深い）テーマが好きです。これまでは、高次脳機能障害がある頭部外傷者の復職に関する評価、パーキンソン病患者の上肢動作と視覚刺激の質との関係などをテーマに研究を行ってきました。

今後、高次脳機能障害をひろく捉え、情報処理の観点から作業の治療手段としての有効性を見出したいと考えています。

2. 主な共同研究先

大阪大学・大阪河崎リハビリテーション大学・大阪保健医療大学

3. 今まで指導した学位論文名

<修士論文>

『アルツハイマー型認知症患者の上肢操作における予測的戦略の検討』

<博士論文>

『Relationship between severity and finger dexterity in Alzheimer' s disease patients. -Analysis of the motor strategy of reaching movements-』

『EEG components specific to reference own hands』

『Development of Japanese version of the empowerment scale for hospitalized older patients 』

4. 主な論文

- Y. Naito, M. Yamaguchi, H. Ando : Assessment of Traumatic Brain Injury Patients by WAIS-R,P300,and Performance on Oddball Task Kobe Journal of Medical Sciences, Vol.51,No.5, 95-105, 2005
- Makoto Matsushita, Kohkichi Hosoda, Yasuo Naito, Haruo Yamashita, Eiji Kohmura : Utility of diffusion tensor imaging in the acute stage of mild to moderate traumatic brain injury for detecting white matter lesions and predicting long-term cognitive function in adults., Journal of Neurosurgery, 115 (1),130-139, 2011
- Tamaru Y, Naito Y, Nishikawa T.: Earlier and greater hand pre-shaping in the elderly: a study based on kinematic analysis of reaching movements to grasp objects. Psychogeriatrics, 17(6), 382-388. 2017.
- Nagata Y, Tanaka H, Ishimaru D, Uematsu M, Naito Y, Nishikawa T.: Development of the Japanese version of the Quality of Life in Late-stage Dementia Scale. Psychogeriatrics, 18(2), 106-112. 2018.
- Ishii R, Naito Y. : EEG connectivity as the possible endophenotype in adult ADHD. Clin Neurophysiol, Mar;131(3):750-751. 2020.
- Tamaru Y, Tanaka H, Ueda M, Sumino H, Imaoka M, Matsugi A, Nishikawa T, Ishii R, Naito Y.: Effect of Alzheimer's disease severity on upper limb function. Psychogeriatrics, 20(5):802-804. 2020.

5. 現在の指導している大学院生数

D1 : 2名、D3 : 4名

6. どのような大学院生の受け入れを希望するか？

研究テーマは、基本にご自身で決めていただけます。ですので、あらかじめ、自分の取り組みたい研究テーマを具体的にする必要があります。資格は特に問いませんので、研究内容に関心のある方は、事前にご相談ください。

1. 主な研究内容について

- 1) 作業 (occupation) の健康への寄与に関する大規模コホート研究
 - ・住民健診データを基にした疫学調査。
- 2) 作業科学を基盤とした高齢者の認知機能低下抑制に関する研究
 - ・市町村が実施する介護予防教室において、作業 (occupation) への挑戦と認知機能低下抑制の研究を実施。
 - ・地域在住高齢者を対象とした作業に認知刺激を組み込んだ二重課題の認知機能低下抑制についての介入研究。
 - ・作業を用いた予防的作業療法の効果を海馬容積から検証。
- 3) 地域在住高齢者の転倒予防に関する介入研究
 - ・松原市社会福祉協議会との共同研究において、転倒予防介入の研究を実施。
 - ・2020年度より、オンラインによる転倒予防介入を開始。
 - ・OpenPoseによる姿勢分析

2. 主な共同研究先

和歌山県立医科大学、隆生福祉会、信州大学、森ノ宮医療大学、松原市社会福祉協議会、介護老人保健施設ヴァンサンク、阪急・阪神ホールディングス、ユカイ工学株式会社

3. 今まで指導した学位論文名

作業 (occupation) を組み込んだマルチドメイン介入の認知機能低下抑制：実行可能性研究
 コンピュータービジョンテクノロジー (OpenPose) を用いた開眼片脚立位姿勢の量的評価と転倒との関連
 日本版 The Health Enhancement Lifestyle Profile (HELP) の開発および信頼性と妥当性の検証
 通いの場を利用する高齢者における ICT 活用の多面的な影響の検討 他

4. 主な論文・著書

- ・ Yokoi K, Miyai N, Utsumi M, et al. The Relationship Between Meaningful Occupation and Self-Rated Health in Japanese Individuals: The Wakayama Study. *Occup Ther Health Care*. 34(2):116-130, 2020.
- ・ Yokoi K, Kurasawa S, Utsumi M, Miyai N. Relationship between Child Occupational Self-Assessment and Quality of Life in Elementary School Children. *Journal of Occupational Therapy, Schools, & Early Intervention*. 13(1): 7-18, 2020.
- ・ Yokoi K, Miyai N, Utsumi M, Hattori S, Kurasawa S, Hayakawa H, Uematsu Y, Arita M. Relationship between Fall History and Self-Perceived Motor Fitness in Community-Dwelling People: A Cross-Sectional Study. *J Clin Med*. 13;9(11):3649, 2020.
- ・ Kawanishi K, Kudo S, Yokoi K. Relationship Between Gliding and Lateral Femoral Pain in Patients With Trochanteric Fracture. *Arch Phys Med Rehabil*. 101(3):457-463, 2020.
- ・ Yokoi K, Miyai N, Tsuji K, Arima M, Kurasawa S, Hayakawa H, Uematsu Y, Arita M: Associations between deterioration of self-rated health and occupational form among community-dwelling Japanese individuals. *Public Health in Practice* 2: 100147, 2021.
- ・ Yokoi K, Sakakibara Y, Inamoto T, Fujii Y, Sakai H. Dual-Task Training Combining Cognitive Tasks and Occupations among Japanese Community-Dwelling Older Adults: A Pilot Study. *Occup Ther Health Care*. 36(4):422-439, 2022.
- ・ Yokoi K, Miyai N, Sougawa Y, Hattori S, Utsumi M, Nakamura M, Arita M. Impact of non-subjective memory complaints on occupational characteristics in community-dwelling people. *Arch Gerontol Geriatr Plus*. 2025

(院生)

- ・ Nakahara K, Yokoi K. Role of Meaningful Social Participation and Technology Use in Mitigating Loneliness and Cognitive Decline Among Older Adults. *Am J Occup Ther*. 78(6):7806205150. 2024.
- ・ Nakamura M, Yokoi K, Tanimura H, Hwang EJ. Psychometric Properties of the Japanese Version of the Health Enhancement Lifestyle Profile (HELP-J) Using Rasch Analysis: A Preliminary Study. *Occup Ther Health Care*. 39(2):448-465. 2025. (国際共同研究)
- ・ Kurogi T, Yokoi K, Hayashi R, Tanaka H: Emotion-oriented coping styles are Associated with higher stress response and lower quality of life in patients with Schizophrenia, *Current Psychology*, 43(42), 32993-33002, 2024.

5. 現在の指導している大学院生数

M1 : 1名、D1 : 1名、D2 : 3名、D3 : 3名

6. どのような大学院生の受け入れを希望するか?

- ・ 作業 (occupation) の健康への貢献について関心がある方。
- ・ 介護予防に関する新しい介入戦略を打ち立てたい方。
- ・ 年15回程度のフィールド調査(大阪府内、和歌山県内)に参加できる方。
- ・ 研究に対して、粘り強かつ真摯に取り組むことができる方、臨床で湧き上がった疑問を解決したい方。

■リハビリテーション学研究所 リハビリテーション学専攻 作業療法学領域

田中 寛之 准教授

1. 主な研究内容について

私たちの研究グループでは認知症、高次脳機能障害、統合失調症を対象として、評価・介入技法、運転支援方法の開発について臨床研究を行ってきました。主に1)を中心として次の研究課題にグループで取り組んでいます。

- 1) 認知症の認知機能障害、日常生活活動、行動心理学的症候、QoL、生活リズムの評価・介入について
- 2) 脳血管障害や頭部外傷などの器質的損傷による高次脳機能障害の評価について
- 3) 就労支援のための精神疾患を持つ方に対する生活リズム評価・介入について
- 4) 障がい者・高齢者への新しい運転支援に関する評価方法の開発

2. 主な共同研究先

株式会社介護サプリ、ソフトバンク株式会社、大阪市城陽地域包括支援センター、大阪大学大学院医学系研究科精神医学教室、鹿児島大学、森ノ宮医療大学、奈良学園大学、さわかみ病院、伊丹せいふう病院、友誼会総合病院、京都民医連あすかい病院、協和会病院、岸和田リハビリテーション病院、東香里病院、大阪府急性期・総合医療センター、西大和リハビリテーション病院、NPO 法人日本学び協会 ワンモア、鶴飼リハビリテーション病院、Wellbeing 共創センターなど

3. 今まで指導した学位論文名

<修士論文>

2020 年度：半側無視の気づきに関する検討

2022 年度：自動車運転支援における停止車両評価の臨床的有用性の検討

2022 年度：認知症者における行動心理症状と認知機能、日常生活活動との関連性の検討

2023 年度：認知症者における作業療法中の態度・行動と焦燥性興奮の関係性

2024 年度：回復期リハビリテーション病棟における認知症患者の環境要因と認知機能、日常生活活動、行動心理症状との関連性の検討

4. 主な論文

- Kagino S, Miyazaki N, Tanaka H. (2025): A study on brake-accelerator reaction times in elderly patients after artificial knee joint and hip joint replacement surgery. Traffic Injury Prevention. in press.
- Tanaka H, Nagata Y, Ishimaru D, et al. (2024) : Factors of clinical importance for the performance of the few remaining abilities of ADLs in Severe Dementia: Analysis of toileting, feeding, and physical ambulation assessed using the Physical Self-Maintenance Scale, International Journal of Gerontology, 18, 321-235.
- Tanaka H, Umeda R, Nagata Y, et al. (2022): Clinical Utility of an Assessment Scale for Engagement in Activities for Patients with Moderate to Severe Dementia; Additional Analysis, Psychogeriatrics, 22(4), 433-444.
- Tanaka H, Umeda R, Shoumura Y, et al. (2021): Development of as Assessment Scale for Engagement in Activites for patients with Moderate to Severe Dementia. Psychogeriatrics, 21(3): 368-377.
- Leung S, Tanaka H, Kwok T. (2021) : Developemnt of Chinese Version of Quality of Life in Late-Stage Dementia and Cognitive test for Severe Dementia. Dementia and Geriatric Cognitive Disorder Extra, 10(3): 172-181.
- Tanaka H, Nagata Y, Ishimaru D, et al. (2020) : Possibility of Cognitive improvement in severe dementia: A Case Series assessed by Cognitive Test for Severe Dementia. International Journal of Gelontology, 15(2): 174-176.
- Tanaka H, Nagata Y, Ishimaru D et al. (2019) : Clinical factors associated with activites of daily living and their decline in patients with severe dementia. Doi: 10.1111/p, 20(3), 327-336. など, 他多数

5. 現在の指導している大学院生数

M1 : 3 名、M2 : 2 名、D1 : 2 名、D2 : 1 名

6. どのような大学院生の受け入れを希望するか？

当ゼミでは国内だけでなく国際的水準に合わせた研究を進めます。研究グループに所属する大学院生・研究員の皆さまは、ご自身の臨床現場でデータを収集されています。対象者（患者・利用者）に還元できる研究をしたいと考えられている「熱心で高い志のある方」「自発的・自主的に行動できる方」「粘り強く研究を続けることができる方」を募集します。経験年数は問いませんが、礼節を重んじて他者に配慮ができ、我々とともに成長できる方を受け入れたいと考えています。ゼミは、認知症、高齢者、高次脳機能障害、運転支援等に関する英語文献の抄読会を中心に、その他に研究計画、学会・論文発表前には個別ゼミ、少人数ゼミ、適宜オンライン・オフラインなど目的に応じた形で行っています。ゼミの見学等についても可能ですので、気軽に連絡をください。

1. 主な研究内容について

- ・自閉スペクトラム症に対する認知リハビリテーションによる脳内ネットワーク変化の解析 (科研費・研究代表者)
- ・統合失調症に対する社会認知トレーニング (SCIT) の作用機序の脳波による解明 (科研費・研究分担者)
- ・「パラレルな場 (並行集団)」での作業量をもたらす効果の脳科学的機序の解明 (科研費・研究分担者)
- ・統合失調症に対する認知リハビリテーションが脳の神経活動に与える効果の解明 (科研費・研究代表者)
- ・統合失調症に対する認知リハビリテーションによる脳内ネットワーク変化の解析 (科研費・研究分担者)
- ・ウガンダ農村社会で生活するてんかん患者とその家族のための包括的ケアのモデル構築 (科研費・研究協力者)

上記のほかに、北海道の児童に対する調査研究、全国の大学生を対象にしたアルコール依存リスクに関する調査、地域在住高齢者を対象とした認知機能面からヘルスプロモーションを検討する調査に参加してきました。近年は精神科リハビリテーション (認知機能) や脳波 (EEG) を用いた作業療法研究を中心に活動しています。

2. 主な共同研究先

北海道大学、名古屋大学、札幌医科大学、広島大学、長崎大学、信州大学、大阪河崎リハビリテーション大学、大阪保健医療大学、金沢星稜大学、石川県立看護大学

3. 今まで指導した学位論文名

〈修士論文〉

- ・音楽聴取がうつ病患者の気分・覚醒と空間推論に与える影響 (他大学)

4. 主な論文

- ・ Junya Orui, Keigo Shiraiwa, Fumie Tazaki, Takao Inoue, Masaya Ueda, Keita Ueno, Yasuo Naito, Ryouhei Ishii. Social buffering effects during craft activities in parallel group session revealed by EEG analysis and parasympathetic activity. *Neuropsychobiology* 2023;82(5):287-299.
- ・ Miyajima Maki, Miyata Tomoki, Murakami Yui, Yotsumoto Kayano, Ukita Atsuki, Morimoto Takafumi, Kobayashi Masayoshi, Tanaka Hiroyuki, Yamada Sumie, Matsusaki Yuri, Inoue Takao (Corresponding author) . Risk level-specific hazardous drinking factors of alcohol use disorders in Japanese university students. *Journal of Substance Use* October 2022.
- ・ Ryota Imai, Masakazu Imaoka, Hidetoshi Nakao, Mitsumasa Hida, Fumie Tazaki, Takao Inoue, Junya Orui, Misa Nakamura. Association between chronic pain with presarcopenia and central sensitization in Japanese community-dwelling older adults: A cross-sectional study. *Medicine (Baltimore)*. 2022 Aug 12;101(32) .
- ・ Yuri Sakai, Chong Chen, Atsuhito Toyomaki, Naoki Hashimoto, Kan Kitagawa, Takao Inoue, Asumi Sato, Keisuke Makihara, Rie Kameyama, Yumi Wakatsuki, Niki Udo, Ryosuke Shirakawa, Takashi Yokota, Shin Nakagawa, and Ichiro Kusumi. A Brief, Individualized Exercise Program at Intensities Below the Ventilatory Threshold Exerts Therapeutic Effects for Depression: A Pilot Study. *Front. Behav. Neurosci.*, 22 November 2021.
- ・ Shan Yun, Risa Takashima, Kazuki Yoshida, Daisuke Sawamura, Takao Inoue, Shinya Sakai. Differences of expected intervention effects between participant-led and facilitator-led preventive care services in Japan. *Hong Kong Journal of Occupational Therapy*, 2021.
- ・ Risa Takashima, Takao Inoue (Corresponding author), Yuko Yoshida. Effects of color narrative in community-dwelling older adults: A mixed methods study. *Scandinavian Journal of Occupational Therapy* Dec 5;1-13, 2020.

5. 現在の指導している大学院生数

なし

6. どのような大学院生の受け入れを希望するか?

精神領域のリハビリテーションやヘルスプロモーションに関して興味がある方に対して、研究計画の立案や実施、解析、そして発表や執筆迄をサポートします。

学内外の教員や院生と意見交換や交流できるにも一緒に参加し、共に知見を深めたいと考えています。

また、在学期間中はデータ収集や解析、論文執筆に根気強く意欲的に取り組む続けることができる方を募集しています。事前にご相談ください。

1. 主な研究内容について

ヒトが運動や感覚情報を処理する際の脳活動を、簡便でリハビリテーションとの親和性も高い脳波(EEG)を用いて解明することで、作業療法の手法や科学的根拠の創出に取り組んでいます。また、特定の疾患によって起こる脳機能の低下や改善と脳活動の関連を脳波解析によって明らかにすることで、疾患の特徴の解明やそれに対するリハビリテーション方法の開発に貢献することを目指しています。

現在の主な研究は以下の通りです。

- ・「半側空間無視患者の症状と脳活動に関する縦断研究」
- ・「脳腫瘍患者の高次脳機能と脳波解析による Brain Functional Connectivity の関連」
- ・「簡易脳波計を用いた作業活動や運動イメージ時の脳活動の計測とそのリハビリテーションへの応用」

2. 主な共同研究先

京都大学、京都大学医学部附属病院、大阪大学、医療法人穂翔会村田病院、社会医療法人清恵会三宝病院

3. 今まで指導した学位論文名

なし

4. 主な論文

- ・ Ueda M, Ueno K, Inoue T, Sakiyama M, Shiroma C, Ishii R, et al. (2025) Detection of motor-related mu rhythm desynchronization by ear EEG. *PLoS ONE* 20(4): e0321107.
- ・ Ueda M, Ueno K, Yuri T, et al. EEG Oscillatory Activity and Resting-State Networks Associated with Neurocognitive Function in Mild Traumatic Brain Injury. *Clinical EEG and Neuroscience*. 2024;56(3):271-281.
- ・ Ueda M, Yuri T, Ueno K, Ishii R, Naito Y. The Neurophysiological Features Associated with Unilateral Spatial Neglect Recovery: A Scoping Review. *Brain Topogr*. 2023 Sep;36(5):631-643. doi: 10.1007/s10548-023-00980-x. Epub 2023 Jul 6. PMID: 37410274.
- ・ Ueda M, Usami K, Yamao Y, Yamawaki R, Umaba C, Liang N, Nankaku M, Mineharu Y, Honda M, Hitomi T, Ikeguchi R, Ikeda A, Miyamoto S, Matsuda S, Arakawa Y. Correlation between brain functional connectivity and neurocognitive function in patients with left frontal glioma. *Scientific Reports*, Nov 8;12(1):18302. 2022,
- ・ Ueda M, Ueno K, Inamoto T, Shiroma C, Hata M, Ishii R, Naito Y. Parietal Gamma Band Oscillation Induced by Self-Hand Recognition. *Brain Sciences* 12(2):272.2022 <https://doi.org/10.3390/brainsci12020272>

5. 現在の指導している大学院生数

なし

6. どのような大学院生の受け入れを希望するか？

脳波などを用いた神経生理学的手法を活かしてリハビリテーションに貢献する、また脳損傷者のリハビリテーションに興味がある方、意欲的に探求される方を希望します。一度事前にご相談ください。

1. 主な研究内容について

身体障がい者のADL動作に関する研究や、中枢疾患における上肢・手指の運動精度に関する基礎的研究、福祉用具の開発に関する研究などを中心に実施しています。また、近年は障がい者の災害対策に関する研究にも取り組み、多くの研究疑問に関する検証・実証を行いたいと考えています。そして、臨床における客観的な評価・治療プログラムの発展に寄与することを目的に取り組んでいます。

主なテーマ

- ・障がい者のADL動作と生活環境に関する研究
身体に障がいのある方はどのような環境が過ごしやすいのかなど、環境のデータや筋電図等の生体データをもとに研究・解析をしています。
- ・上肢・手指の運動学習・運動精度に関する研究
中枢疾患における麻痺手・上肢の運動精度及び脳機能連関、運動学習による上肢機能の効果的介入等に関し生理学的データを基に研究しています。
- ・福祉用具の研究開発
障がいのある方が在宅・施設において、より安全で利用しやすく、自立度の改善・介護負担の軽減が図れる福祉用具の研究及び開発を行っています。また、近年はAIを活用した関連機器のDX化についても検討し、それらを活用した災害など緊急時に役立つ福祉用具・デバイスの開発も実施しています。
- ・障がい者の防災に関する研究
災害時における障がい者の避難環境に関する研究をしています。特に避難所・福祉避難所などのバリアフリー環境やUniversal Designを中心に調査研究を実施しています。

2. 主な共同研究先

大阪公立大学工業高等専門学校、大阪公立大学都市科学・防災研究センター、訪問看護ステーション、国立病院機構南京都病院、など

3. 今まで指導した学位論文名

2023年度：避難所における障がい者のADL支援に関する研究

2020年度：ALS患者における意思伝達装置入力のためのスイッチ動作の解析

4. 主な論文

- ・福田望琴, 小島久典: 避難所における障がい者の日常生活動作に関する研究, Journal of Environmental Rehabilitation Science, 4, 1-7, 2023
- ・上田慶, 小島久典: 災害時ロジスティクスに関する業務の実践報告, Journal of Environmental Rehabilitation Science, 3, 1-4, 2019
- ・Kojima H, Inumaru T, Ueda T: Evaluation of evacuation environment of disabled persons in designated shelters, Journal of Environmental Rehabilitation Science, 2(1), 1-5, 2018
- ・Kojima H, Shimizu J: The relationship between the heights of the push switch in the sitting and standing positions, Journal of the Tsuruma Health Science, 34, 91-99, 2011
- ・小島久典, 岡田行央: 手指押し動作における手関節の影響, 医学と生物学, 153(10), 457-462, 2009
- ・Kojima H, Inumaru T, Abe R, Ueda T: Prototype Quantitative Mechanical Device for Measuring Tactile and Pressure Sense: Measurement of Movement Precision in Hand Palsy Associated with Cerebrovascular Disease, Journal of Rehabilitation and Health Sciences, 5, 39-41, 2007

5. 現在の指導している大学院生数

なし

6. どのような大学院生の受け入れを希望するか?

様々な事柄に興味・関心を持ちながら、じっくりと主体的に探究していく方を歓迎します。そして、リハビリテーション・作業療法・関連分野における疑問を科学的に探索する意欲ある方を希望します。近年の研究は、AIなど最先端技術の活用やその関連技術を用いた応用開発が期待されています。現在の研究テーマをさらに深化させるため、関連分野の皆様とDX化・ファインチューニングを目指し取り組んでいます。業務との兼ね合いもあるかと思いますが、ZOOM等積極的に活用し一緒に研究を進めましょう。

1. 主な研究内容について

当研究室では、精神障害に関して、精神的側面だけでなく身体的側面を加えた「脳-精神-身体」の関連を捉える研究に取り組んでいます。「脳」と「精神」と「身体」の関連から、精神疾患の病態を捉えていきたいと考えています。

主な研究テーマは、統合失調症の認知機能障害に関する研究と、内受容感覚に関する研究です。

具体的には以下のようなテーマに取り組んでいます。

- 1)統合失調症の表情認知や複雑な状況判断・意思決定能力と社会機能との関連
- 2)内受容感覚の鋭敏さと意思決定
- 3)内受容感覚の鋭敏さと共感

このような研究テーマに加えて、精神障害のある方の回復に役立つ新しい評価や介入技法などについても探求していきたいと考えています。

2. 主な共同研究先

なし

3. 今まで指導した学位論文名

<修士論文>

2022年度：統合失調症患者における動機づけの制御の側面に着目した探索的研究

2020年度：精神障がい者との社会的接触によるスティグマ低減効果の検討および効果的な社会的接触の探索

2020年度：統合失調症のコーピングスタイルと関連する因子の探索

4. 主な論文

- Tatsunari Kurogi, Katsushi Yokoi, Ryota Hayashi, Hiroaki Tanaka : Emotion-oriented coping styles are Associated with higher stress response and lower quality of life in patients with Schizophrenia, Current Psychology, 43(42), 32993-33002, 2024
- 黒木 達成, 浦川 瑞生, 永田 優馬, 田中 宏明 : 20年間ひきこもり生活を送っていた対象者への関わり 孤独感とつながりの意識変容に着目して, 精神障害とリハビリテーション, 28(2), 209-214, 2024
- 浦川瑞生, 小川泰弘, 真庭大典, 坂井大吾, 田中宏明 : 前後比較試験を用いた A 市青年会議所の会員と精神障がい者との社会的接触によるスティグマ低減効果の検討, 精神障害とリハビリテーション, 27(2), 172-178, 2023
- 林良太, 永井愛夏, 四海真理子, 黒田健治, 田中宏明, 稲富 宏之 : 統合失調症に対するメタ認知トレーニング日本語版の実施が認知的洞察に与える影響について, Journal of rehabilitation and Health Sciences, 16, 7-10, 2020
- 福原啓太, 田中宏明, 西田齊二, 小川泰弘, 森泰祐, 西川隆 : Distraction 技能獲得により不安の軽減と自己効力感ならびに社会生活活動の改善がみられた一例, 大阪作業療法ジャーナル, 32(2), 135-142, 2019

5. 現在の指導している大学院生数

なし

6. どのような大学院生の受け入れを希望するか?

精神科リハビリテーションに関する研究テーマに対して、意欲的に探求していく大学院生を求めます。

事前に相談してください。

1. 主な研究内容について

インクルーシブ教育と作業療法、こども/神経発達症領域の作業療法などに関する研究テーマに取り組んでいます。
主な研究は以下の通りです。

- ・「就学前施設で気になる子どもの特性把握と作業療法士の専門性を活かした支援法の開発」
(2024 科研・研究代表者)
- ・「未診断幼児の就学支援に向けたコンサルテーションモデル開発に関する研究」
(2023 戦略的研究推進事業 若手研究者支援・研究代表者)
- ・「自閉スペクトラム症児の食具操作支援を目的とした深層学習を用いた動作解析」
(2020 女性研究者 研究実践力強化支援プログラム RESPECT・研究代表者)
- ・「自閉スペクトラム症児の食に関する行動障がいへの支援法の開発」(2019 科研・研究代表者)
- ・「自閉症スペクトラム児の食に関する行動障がいの重症度を測定する尺度の開発」(2016 科研・研究代表者)
- ・「Kyushoku Practices in Reducing Challenging Mealtime Behaviors Among Children」
(2025 The Sumitomo Grant・研究分担者)
- ・「介護老人保健施設の多職種で活用可能なトイレ動作尺度開発と原因別支援法の構築」(2024 科研・研究分担者)
- ・「要支援者自身が IADL 能力の程度と変化を捉える評価尺度の開発」(2023 科研・研究分担者)
- ・「通常の学級に在籍する児童への作業療法士のコンサルテーション・モデルの実証的研究」
(2018 科研・研究分担者)

2. 主な共同研究先

京都橘大学、藍野大学、白鳳短期大学、関西福祉科学大学、広島大学、高知健康科学大学、福島県立医科大学、コクヨ株式会社、合同会社 BASE ともかな、特別支援学校、認定こども園など

3. 今まで指導した学位論文名

〈修士論文〉

2024 年度：児童発達支援・放課後等デイサービスを利用する児童の困難さの内容分析および関連する感覚特性の検討

4. 主な論文

- ・ Kazuyo Nakaoka, Kiyomi Tateyama, Takuma Yuri, Shun Harada, Shinichi Takabatake: Predictive validity and cut-off score of the Mealtime Behavior Questionnaire for children with autism. *Research in Autism Spectrum Disorders* 110:2024.
- ・ 原田瞬、立山清美、倉澤茂樹、丹葉寛之、中岡和代、川崎一平、永井邦明: 知的障害区分の特別支援学校における作業療法士による学校コンサルテーションの効果検証. *作業療法* 43(1)p23-32.2024.
- ・ Shun Harada, Kiyomi Tateyama, Shigeki Kurasawa, Hiroyuki Tanba, Kazuyo Nakaoka, Ippei Kawasaki, Kuniaki Nagai: Characteristics of Occupational Therapists' Advice in School Consultations: Content Analysis of Advice for Consultation on Problem Behavior in a Special Needs School for Intellectual Disability. *Asian Journal of Occupational Therapy* 19(1) 153-160.2023.
- ・ Yasuhiro Higashi, Shinichi Takabatake, Asako Matsubara, Koji Nishikawa, Toshikatsu Kaneda, Kazuyo Nakaoka, Yuta Somei, Guðrún Árnadóttir: Neurobehavioral Impairment Scale of the A-ONE J: Rasch Analysis and Concurrent Validation. *Asian Journal of Occupational Therapy* 19(1)p30-37.2023.
- ・ Kazuyo Nakaoka, Hiroyuki Tanba, Takuma Yuri, Kiyomi Tateyama, Shigeki Kurasawa: Convergent validity of the Autism Spectrum Disorder Mealtime Behavior Questionnaire (ASD-MBQ) for children with autism spectrum disorder. *PLoS ONE* 17(4): e0267181. 2022.
- ・ 倉澤茂樹、立山清美、塩津裕康、中岡和代、大歳太郎：問題行動を呈する児童への作業療法士による学校コンサルテーション. *作業療法* 40(3)p359-369.2021.
- ・ Kazuyo Nakaoka, Shinichi Takabatake, Kiyomi Tateyama, Shigeki Kurasawa, Hiroyuki Tanba, Ryouhei Ishii, Yasuhiro Higashi, Toshikatsu Kaneda: Structural Validity of the Mealtime Behaviour Questionnaire for Children with Autism Spectrum Disorder in Japan. *Journal of Physical Therapy Science* 32(5)p352-358.2020.
- ・ 中岡和代、立山清美、倉澤茂樹、丹葉寛之、高畑進一：自閉スペクトラム症児の食に関する行動を測定する尺度の開発—妥当性と信頼性の検討—. *作業療法* 38(2)p151-162.2019.
- ・ Miyajima, A, Tateyama, K, Fujii, S, Nakaoka, K, Hirao, K, Higaki, K: Development of an intervention programme for selective eating in children with autism spectrum disorder. *Hong Kong Journal of Occupational Therapy* 30p22-32.2017.
- ・ 倉澤茂樹、立山清美、中岡和代、福井信佳、大歳太郎：食に課題のある児童生徒への栄養教諭と作業療法士の協働の有効性の検討. *作業療法* 37(3)p323-329.2018.

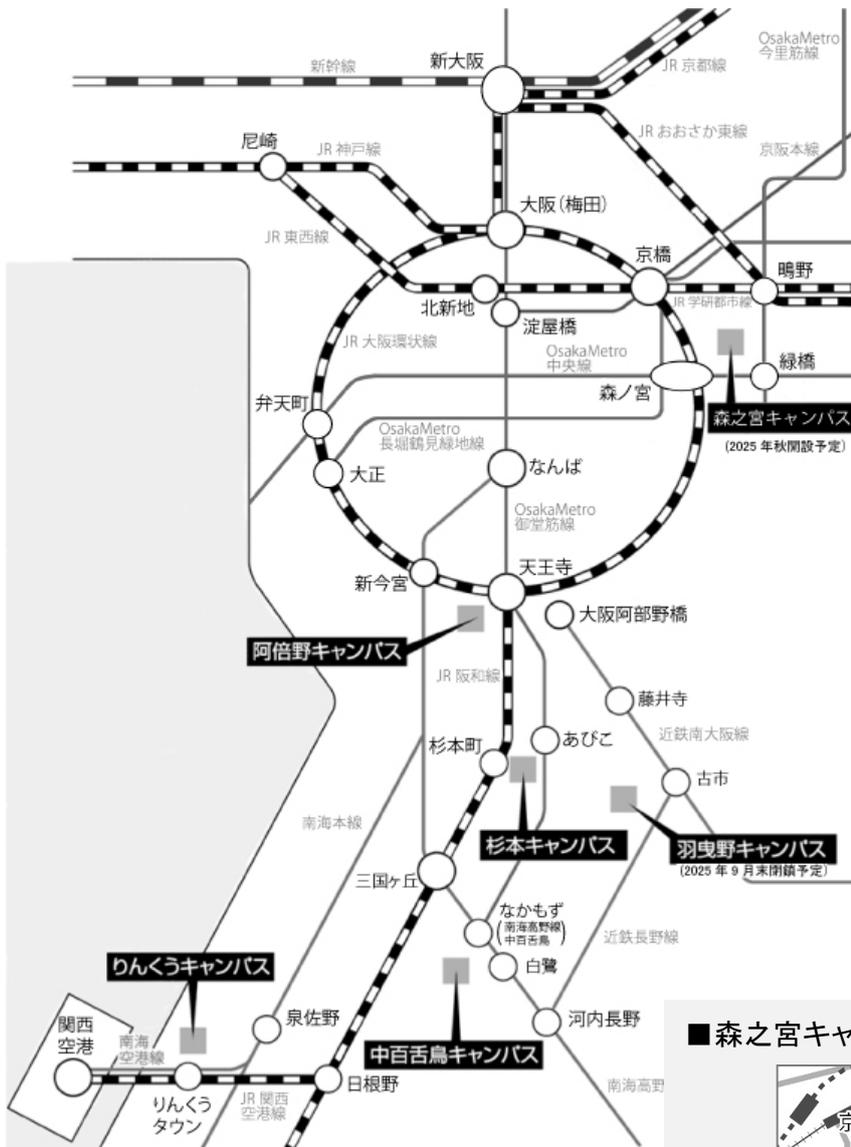
5. 現在の指導している大学院生数

M1：1名、M2：2名

6. どのような大学院生の受け入れを希望するか？

特別支援教育/インクルーシブ教育、神経発達症領域の作業療法などに関する研究テーマに対して、興味関心があり、意欲的に探究される方を希望します。事前にご相談ください。

◇交通アクセス



■羽曳野キャンパス (2025年9月末閉鎖予定)



- ・近鉄南大阪線「藤井寺駅」下車、南口近鉄バス（1番のりば 71、78 系統、3番のりば（銀行前）61、62、65、66、67 系統）で約 10 分、「府立医療センター」下車、徒歩約 10 分
- ・近鉄南大阪線「古市駅」下車、近鉄バス（1番のりば 87 系統）で約 10 分、「大阪府立大学羽曳野キャンパス」下車。又は近鉄バス（2番のりば 81、82 系統）で約 10 分、「府立医療センター」下車、徒歩約 10 分

■森之宮キャンパス (2025年秋開設予定)



- ・Osaka Metro 中央線・長堀鶴見緑地線、JR 大阪環状線「森ノ宮」駅下車、徒歩約 13 分
- ・Osaka Metro 長堀鶴見緑地線「京橋」駅下車、徒歩約 20 分
- ・JR 大阪環状線・JR 東西線・学研都市線、京阪本線「京橋」駅下車、徒歩約 15 分
- ・Osaka Metro 中央線・今里筋線「緑橋」駅下車、徒歩約 15 分
- ・Osaka Metro 今里筋線、JR おおさか東線・学研都市線「鳴野」駅下車、徒歩約 13 分

